

父を戦争に奪われて

春日市 寄川 ミエ子

昭和16年12月、本籍地、八女郡黒木町役場より父は召集されている。

私は甘いものに飢えていたんだらう、落雁饅頭を覚えています。黒木国民小学校2年生の時、奉安殿の扉が開かれ、校長先生のお話を聞き、紅白の菊模様の落雁饅頭を二つ頂き大切に持って帰りました。2月11日、紀元節だったと思います。

昭和18年、金属回収がありました。母が家にある、鉄製の井戸ポンプと蓄音機のラッパの部分为学校へ供出してくれました。私はドングリ、カシの実を山で拾って学校に出しました。1m以上あるポンポン草、イラクサ科のラミーを山や川の土手で鎌で刈り、水に漬け、叩き皮を剥がし、干して供出しました。皮の繊維から布を織るのだそうです。

稲の苗床の害虫取りは上級生に指導されて細い竹で、稲の裏側に付いた卵を取りました。松の木にキズを付けて、空缶をくくり付け油を集めました。ガソリンの代用になるそうです。夜の明かりは灯火管制で黒い布を被せたり、電気節約で線香ほどの灯りの日もあった。小皿に油と糸を入れ照らし勉強した。空襲警報のサイレンが鳴ると灯りを消しました。

隣組では国防服の老人男性一人と雪衿姿の母達で消火訓練のバケツリレー、竹槍の練習がっていました。空襲に備えてどこの家の前にも水の汲み置きや砂袋が積んであり、縄のはたきも用意してあった。母は飛行場の作業に行ったり、軍服の星やボタン付けの仕事もしていた。

学校の防空壕掘りに父兄会からの作業に母が仕事で行けず、私と妹と二人で出ました。

昭和19年の夏、9才の私と6才の妹と祖母の農家の大洲村に疎開させられた。敵軍に見つからないよう、夏でも黒い服を着せられていた。家の外壁も煤で黒く塗ったり、藁で白壁を隠してあった。

馬、牛、鶏がいて蠅が沢山いた。夜はやぶ蚊に刺され、塩をこすり付けてかゆみを我慢した。疎開先の剣持小学校は複式学校でした。

学校から帰って従兄弟の子守、五右衛門風呂焚き、杉の枯れた小枝を付ききりで燃すが、煙たくて目が痛く涙が出た。馬の餌はハミ切りで青い藁を3cmぐらいに桶一ぱい切らなければならず大変だった。

6才の妹は10畳くらいの板張りを毎晩拭かされていた。夕食後、私は土間に筵を敷き、藁草履を1足編む。9才の私が作ったのは緩く、二日も履けば破けた。妹の分と必ず作らなければならなかった。靴の配給は1年間に1足も買えなかった。

母が着物を解き、雪袴上下と防空頭巾を作り、帯でコートやざつのを作り持って来てくれた。タオルは盆、正月に祖母が大人だけに1枚ずつ渡していた。子供達は洗顔の時、入浴の時は祖母や叔母のタオルを借りました。

叔母達も緋の野良着を伏せ、継ぎはぎして元布はどれだったのか、分からない程だった。素

手で農作業し、夜は膏薬を手足の輝（あかぎれ）に付けていた。若い叔母が馬を使って田を耕すのに輝に藁が刺さって痛いと言っていた。

農家でも米は少く、麦といもの沢山入った御飯、御菜はだご汁か野菜だけの煮しめの繰り返しであった。

トイレの紙は少ない新聞紙で足りず、15人家族だったから、柔らかい草の葉を持って行って、拭きました。

昭和20年3月、名古屋に父の部隊がドック入りしたので面会に行く。母は父に会う前に髪結いさんでコテを当ててもらった。「海軍上等兵曹長殿」と若い兵隊さんが呼んで下さった。1ヶ月ぐらい旅館暮らしをした。水浸しの防空壕に一日中入り怖い思いもしました。

佐世保にも面会に行ったけど、出動しているところで、兵隊さんの中で父を見つけられず、靴の音だけが今も「グアー、グアー」と強くのこっている。戦地からの母への便りに最後にミエ子のことタノムと書いてあった。私の生母は子宮ガンで29才で亡くなっている。2才からの育ての母は心やさしかった。

8月15日終戦、私は10才、戦争に負けたことより、父達が帰って来ると祖母と手を取り合って喜んだ、祖母は5人の息子を戦地に送って辛かったであろう。

私と妹は母の所、黒木小学校に戻りました。学力が低下していて悲しかった、髪や下着のゴムの所にシラミの卵が付き、母が酔に漬けたり熱湯を掛けたりしました。

夏の終りに父の遺骨が帰る。暑いのに黒のセーラー服を着て黒木駅迄迎えに行った。

父は7月28日、41才で戦死していた。戦友の話だと展望台の当番で、肺に弾が貫通して血塗れになって一日呻きながら、息絶えたそうです。

25才の叔父も7月29日、機関室で働いていて船と共に沈んだそうです。

11月に弟が生まれ、初めての男の子で父が生きていたら喜んだでしょうに、でも私は学校に弟を連れて行かなくてはならず辛かった。雨が降ると油紙のやぶれ傘しかなく、学校は休んだ。家の商売、酒小売店の酒の配給が月に1人3合だけで売る酒がなく、私達の着物から座布団まで母は売った。品不足の時代で金持ちも貧乏人も靴下も履かず学校に通った。弁当も持って行かず食べに帰る。保健室でかんゆや虫下しをもらいました。

米の配給もなく、魚や肉等、何年も、10年間ぐらいは食べた記憶がありません。年中サツマイモだけの生活でした。母も農家に衣類の行商に行って、物々交換で芋や米、豆等をリュック一ぱい担いで帰って来た。バスがない時トラックの前で両手を広げて止めた母は必死でした。私も6年生の夏休み、近所の商家へ女中さんに働きに行った。表戸を拭く時、友達や先生が通ると隠れてました。

新制中学校舎を建てるため、生徒も川から砂運び、瓦運びでグラウンド作りと、家から鍬や箕を持って通学した。始めて男女共学になる。

家庭科で編物の毛糸がなく、軍手を解き、糸を二重にしてセーターを編んだ。

家では私が代用主婦、母から5円もらってイモを買って、製材所に車力かりヤカーを引いて

製材のクズ、セーターを買いに行き、イモを煮て主食とした。

蛋白源は川でホウゼをバケツ一杯取って来て、味噌汁に入れて実を縫い針でくるくる回し、尻尾まで食べた。

昭和25年、黒木役場から遺族年金、第1回の支給が始まった。家族4人に合計4000円頂いたそうです。

遺児3人を育てるために母は土木作業の仕事までするように、たくましくなっていた。

私は中3卒業と同時に、口減らしのため子守に出された。未成年ということ、親が亡いこと、良い就職先はなかった。

人生の節目に守ってくれたであろう父を奪われ戦争を悲しみます。